

小十郎と千代 (5)

松永ひろし

2023.2

鶴吉の頼み	2
まずは素振りだ	3
伝授	4
対決	5
弁慶と牛若丸	6

【おもな登場人物】

桜木小十郎 十九歳。真一刀流免許皆伝。齋藤又右衛門道場で代稽古を行う。
齋藤千代 五歳。齋藤又右衛門の孫娘。おかつば頭。気ままでわがまま
鶴吉 七歳。堀江町の魚屋の息子。近所の子どもの親分を自認している。
長吉 八歳。北原町の髪結いの息子。近所の子どもたちを束ねる。鶴吉の喧嘩相手。

鶴吉の頼み

カラタチの白い花が咲く齋藤又右衛門道場の井戸端で、桜木小十郎が体の汗を拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代が入ってきた。続いて男の子が木戸をくぐった。

小十郎は、麻衣の帯に木の枝の棒をさした、この男の子を知っている。堀江町の魚屋の息子で、名は鶴吉。歳は七つ。このあたりの子どもたちの親分を気取っている童だ。背丈は四尺あまり。色黒で、くちびるは厚い。とんぐり眼の精かな面立ちである。

小十郎は鶴吉の顔やむき出しの腕にある青あざをいぶかった。と、千代がいった。

「じいちゃん、しるぎすが たのみがあるそうじや」

小十郎はあらためて鶴吉を見た。鶴吉が神妙な顔で口を開いた。

「小十郎さん、お願いだ。おらに剣術をおしえとくね。とんなに辛くともがんばるから」

「魚屋のむすこが、剣を習ってやります」
「長吉に勝ちたい。勝って以前のようにな、ふくろうの森で遊びたいんだ」

長吉は鶴吉の喧嘩相手だ。ふくろうの森は、千代がホタル狩りをした孝太郎新田の東にある湿地だ。アオタモ、ヤチタモ、ハルニレ、ナラなどが茂り、リュウキンカとニリンソウが群生する。子どもたちはここで、泳ぎ、魚を獲り、クワガタやカブトムシを捕まえる。秘密の基地をつくるやつもいる。

小十郎は訊いた。

「以前のようだと？ すると鶴吉たちは今、ふくろうの森で遊んではいけないのか」

「ああ。遊んでいると長吉に追い出される。昔っから湿地の西にある大ケヤキを境に北がおらたち、南が長吉たちの遊び場なんだ。でも、剣を習った長吉がおらたちを木刀で追うようになったんだ。おらは先日も、この棒で戦ったけど、さんざ打ち負かされて追い出された。おらは親分だから、長吉を打ち負かし、おらたちの遊び場を取り返したいんだ」

いっと、鶴吉は大粒の涙をこぼした。

まずは素振りだ

「そつが」

と小十郎は鶴吉に伝えて頷いた。そして、

「鶴吉、仲間のために、ふくろうの森の遊び場をとりもどしたい気持ちがよくわかった。そこで、まずはおまえの剣の腕前を知りたい。腰の棒でわたしにかかってまいれ」

と促した。鶴吉は、しゃくりあげながら、

「いいのが、小十郎さんは丸腰だろっ」

と訊いた。

「かまわぬ。ほれっ」

と小十郎は鶴吉に正対し、両手を広げた。

「じゃあ、遠慮なくいっよ」

と応えた鶴吉は右手で腰の棒を引き抜くと、袈裟懸け気味に小十郎に振り下ろした。それを小十郎は半歩下がって避けた。せつな、鶴吉は左から横に棒を払った。小十郎はその棒先が自分の体をかすめるや、スッと前に出て右手で鶴吉の左手首をつかみ、ひね

った。

「イテーエッ」

鶴吉が棒を手放して真横に転がった。

「じゅんじゅん つよ〜い」

目を見張って千代が叫んだ。鶴吉は立ち上がり、

「すげえ早さだ。知らんうちに転がされちまった。

小十郎さん、わざを教えとくれ」

と強くいった。小十郎は、

「ああ、修業すれば鶴吉もできる。まずは体づくりだな」

といい、道場にもどって、長く太い木刀を一本持って出てきた。そして、

「鶴吉、家で、この木刀を自在に操れるまで素振りせよ。その時、前後左右に足を素早く動かすことを忘れずに」

と訊いて、木刀を持たせた。千代が、

「じゅんじゅん、するきは つよくなるか」

と訊いた。小十郎が応えた。

「この木刀を、鶴吉が自在に操れたならば」

そのことは聞いた鶴吉は深くうなずき、

「おら、一日も早くそつなるよう頑張る」といってくちびるを一文字に結んだ。

伝授

剣士・桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古を終え、はねつるへ井戸の横で体の汗を拭いていると、道場の西隅から鶴吉が姿をあらわした。そして小十郎の前に来ていった。

「小十郎先生、稽古の首尾を見ていただけますか」

小十郎は訊いた。

「まだ三月（みつき）だが、まこと自在に操れるようになったか」

「はい」と応えて鶴吉は携えてきた木刀を構えた。そして飛び跳ねぎみに、いち、に、いち、に、と木刀を振り下ろした。

小十郎は、木刀の鋭い動きに、七歳の鶴吉がどれ程の覚悟で精進してきたかを感じた。

「よし、鶴吉、及第だ。さらに励め。その折は、飛び跳ねず、摺り足を心がけよ」

「わあ、これ、いいや。ほんとに、おらにくれるのかい」

嬉しさを顔をクシャクシャにした鶴吉に小十郎は、

「そつだ。それは鶴吉のものだ。相手と打ち合う稽古をしていないおまえが、剣を習っている長吉に勝てる戦法をこれより教える」

というや、小十郎は鶴吉が家から持ってきた重い木刀を正眼に構えた。

三日後。昼九つ前。木綿の手拭いで鉢巻した鶴吉

は木刀を携え、遊び仲間の三次と良助を伴い、ふくろつ森に向かった。

長吉たちが、暑さを避けてふくろつ森の中に入ると踏んでの、いわば殴り込みである。

対決

案の定、ふくろつ森に長吉たちはいた。

遊ぶ声が、鶴吉らが歩きついた森わきの草原まで聞こえてきた。鶴吉は大声で叫んだ。

「長吉、い、長吉、聞こえるか。おらあ、堀江町の鶴吉だ。森から出てこい。勝負だあ」

途端、森の中の声が消えた。鶴吉はさらに、「長吉、森から出てこい。われに取られたおらたの森を、おらが取り返しにきたぞあ」と大声を続けた。

森の縁のあちこちに子どもたちが姿をあらわした。そして一町ほど先の草原にたつ、鶴吉たち三人を見とらえて、騒めいた。

「なに、相手は三人だけだと」

鶴吉が地を蹴り、両手で突き出した渾身の一撃が長吉の額を捕らえた。

勝負は一瞬で決つした。失神した長吉は仰向いてドツサと草に倒れた。時をおかず長吉の仲間はそのれに逃げ去った。

弁慶と牛若丸

剣士・桜木小十郎が齋藤又右衛門道場での代稽古を終え、井戸の横で体の汗を拭いていると、横木戸から又右衛門の孫娘の千代が近づいてきた。千代は五つ。気ままにわがまま。

「じいちゃん、つるきちに、なにを、おしえたのじゃ。ちよつきちが、でっかいたんこぶを、こしらえたか。えらいつわさじゃぞ」

小十郎はつわさを聞いていた。だから、「そのよつですな。この三月あまりの修練で、鶴吉は四倍も五倍も強くなりましたから」といった。千代が声高に続けた。

「ちよつきちの、ははおやが、つるきちの、さかな

といつて姿をあらわしたのは、鶴吉より一回り大きな男の子。長吉だ。藍染木綿の衣を着て、角帯に木刀を挟んでいる。目鼻だちが整った美少年で、鶴吉とはえらい違いだ。それも鶴吉の喧嘩心に火がつく理由かもしれぬ。

長吉を先頭に十数人が鶴吉の前にきた。そして長吉の左右に広がった。長吉がいった。

「森を取り返しにきたとほざいたが、本気が」

間をあけず、鶴吉が叫んだ。

「そつだ、本気だ。三月前はひどい目にあわされたが、今日はそのかたきをとらせてもらつ」

鶴吉は手にしている木刀を正眼に構えた。

「ほつ、われも木刀を手に入れたか。木の枝よりちつたあマシになったが、腕はどうだ」

というなり、長吉は腰の木刀を引き抜いて踏み込み、横にはらった。鶴吉は腰を落とし、その木刀をガキツと受けとめると、一歩しりぞいて正眼に構えた木刀の先を長吉の眉間にむけた。

睨み合つてしばし、中段に構えた長吉の木刀がスツと上に動いた瞬間、「ツキ」と鋭い声を発した

やに、どなりこんだそつじゃぞ」

「それは大事になりましたな。怪我をしたとはいえず、子ども同士の喧嘩です。また、元はといえば、長吉が鶴吉らの遊び場所を奪つたため、鶴吉が取り戻そうとしたところ、長吉が木刀で撲つたことが始まり。あいこです」

「つるきちに、けんじゅつをおしえた、こじゅつろつは、とがめられぬか。おこられぬか」

「小十郎がわるいとなれば、長吉に剣術を教える道場もけしからんとの話になります」

「ちよつきちの、たんこぶは、なおるか」

「時がたてばそれなりに。わたくしが鶴吉のために作らせた木刀は切先を平にしてあります。骨は傷ついておらぬでしよつ」

「ちよつきちは、びしょうねんで、つるきちは、あのつらじゃ。うしわかまるが、へんけいにまけたとの、つわさもあらず」

「けしからぬ噂です。牛若丸には『判官』(ほつがん)びいき」とい言葉がつきもので、事の良し悪しはともかく同情されやすい。逆に弁慶にたとえられた

鶴吉は、敵役と見られがち。本当はちがうのに、気の毒です。」

「さきは、さよたさの あそびばのために たたか
った つるまきの みかただけで、ちよつまきの
かおに きすずや あぶがのこつたら かわいそつだ
とおまじ」

千代は真顔（まがお）だった。小十郎は返す言葉
にこまった。